

大学生が制作するケーブルテレビ番組 「多摩探検隊」に関する一考察 ——なぜ約15年間続き、なぜ休止したか——

松野良一*

A Study on the Cable TV Program “Tama Tankentai” Produced by University Students: Why Did It Continue for 15 Years and Why Was It Suspended?

MATSUNO Ryoichi

This article aims to reflect on the student-produced CATV (Community Antenna Television, Cable Television) program “Tama Tankentai (Tama Area Expedition)” and to consider its significance from three perspectives.

(1) Why was it possible to continue the program for 15 years? The first reason is that the production system was established. Like a professional TV station, a systematic organization was completed, and program production activities were conducted efficiently. Additionally, the format of the program was clear, and the production schedule was proactive. Furthermore, the students were selected from all faculties of the university, and their motivation was extremely high.

(2) Why was the program suspended even though the audience numbers have grown to 2.6 million households? The main reason is the difference between TV and YouTube. Television has a “frame” and a “deadline.” However, YouTube does not fill the “frame” because the “scale” of the content is free. Moreover, there is no “deadline” for delivery, and we can upload contents at any time. Due to this ample freedom, we decided to switch the media from CATV to YouTube for distributing contents.

(3) What kind of educational effects did the program production activities provide to the students? First, by communicating with people in the local community, students can grow and gain maturity. Second, the cycle of “planning-shooting-editing-outputting” fostered the following abilities: planning, negotiation, communication, sensitivity, expression, cooperation, responsibility, and self-efficacy.

* 中央大学政策文化総合研究所研究員, 中央大学国際情報学部教授
Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University; Professor,
Faculty of Global Informatics, Chuo University

キーワード：多摩探検隊，ケーブルテレビ，大学生，番組制作活動，ユーチューブ，多様な能力の開発

Key Words：Tama Tankentai, CATV, University Students, Program Production Activities, YouTube, Development of Various Abilities

1. はじめに

「多摩探検隊」¹⁾というのは、中央大学 FLP ジャーナリズムプログラム松野良一ゼミ（以降、FLP 松野ゼミ）が、地域のケーブルテレビ向けに制作していた番組のことである。2004 年 5 月から始まり、2019 年 3 月放送（179 回）まで続いた。約 15 年間毎月連続で、学生がケーブルテレビで放送する番組を制作し続けたという事実は、プロフェッショナルではない者の活動としては、極めて珍しいのではないだろうか。ケーブルテレビでの番組放送終了後は、YouTube に舞台を移し替えて、不定期で更新を行っている²⁾。2022 年 7 月 1 日現在、188 回を数えている。

「多摩探検隊」は、東京・多摩の歴史や話題を取り上げた地域再発見番組で、企画、取材、撮影、編集、パッケージ化のすべてを、FLP 松野ゼミの学生が中心になって行ってきた。「地域」に埋もれている歴史、話題、人物、物語を掘り起こし、それを記録して後世に伝えていこうというのがポリシーである。

この「多摩探検隊」は、10 分間の番組で、ドキュメンタリー形式がベースになっており、毎月 1 本のペースで放送されていた。2004 年 5 月に多摩テレビで放送が始まり、次第に、放送してくれるケーブルテレビ局が増え、最終的には、東京および九州地区のケーブルテレビ計 19 局、視聴可能世帯は約 260 万にまで拡大した。

番組を制作し提供する FLP 松野ゼミと、完パケ（完全パッケージ）³⁾された番組の提供を受け放送するケーブルテレビ局との間には、金銭上の取引はなく、無償で制作し無償で放送するという関係が保持された。ケーブルテレビ局のコミュニティチャンネルに枠をもらい、そこで「多摩探検隊」は定期的に放送されるという形式をとっていた。欧米における「パブリックアクセス」という形式に類似しているが、あくまでケーブルテレビ局の編成枠の一部で放送されるという形式であった。ただ、コミュニティチャンネルの一部を開放し、学生や市民が制作した番組を放送する点では、「パブリックアクセス」に近いものではある。

本論考では、2004 年 5 月から 2019 年 3 月までの約 15 年間続いた学生制作のケーブルテレビ向け番組「多摩探検隊」の制作活動を振り返りながら、3 つの視点で考察する。1 つ目は、なぜ約 15 年間も番組制作を継続することができたのかという視点。2 つ目は、

計 19 局約 260 万視聴可能世帯数という規模にまで成長したにもかかわらず、なぜ休止を決断するに至ったかという視点。3 つ目は、ケーブルテレビで放送されることを前提として番組制作を継続して行うことは、学生にとってどのような教育的効果があったのかという視点である。

2. 「多摩探検隊」の誕生

中央大学では、2003 年から FLP（ファカルティ・リンケージ・プログラム）と呼ばれる新しい教育カリキュラムが始まった。これは、当時の 6 学部（法、経済、商、文、理工、総合政策）の学部の垣根を越えて横断型でゼミ活動を行うプログラムのことである。2022 年 6 月 1 日現在で、環境・社会・ガバナンス、ジャーナリズム、国際協力、スポーツ健康科学、地域・公共マネジメントの 5 つのプログラムがある。

学部横断型で所定の講義科目を履修し、2 年生から 4 年生までの 3 年間にわたって演習に参加して単位を取得すれば、FLP 独自の修了証が授与される仕組みになっている。ある意味、本来所属している学部での専攻がメジャーで、FLP のプログラムがサブメジャーということになる。学部が卒論を目指すのに対して、FLP はフィールド調査など実践活動を行うゼミが多いことが特徴である。

FLP の演習（ゼミ）は、全学部から志願者を募り、選抜試験を経てゼミ生になる。FLP 松野ゼミでは、筆記試験（教養、時事問題、英語）、2 回の面接を経て、ゼミ生候補を選抜した。結果的に、学部のゼミよりも、将来メディアやジャーナリズム関係の仕事に携わりたいというモチベーションの高い学生が集まるという特徴があった。約 15 年間も番組制作活動が続いた背景には、このモチベーションの高さが、1 つの要因であったことは間違いない。

2003 年 4 月から FLP 松野ゼミ（1 期生）の活動は始まった。まず 2003 年は実際に映像作品を制作してみようという手探り状態から始まった。学生は、企画書も満足に書けないレベルであったが、大学内でロケをやって、短いビデオクリップを作るという練習から始めた。当時は、民生用カメラ（記録媒体 miniDV）で撮影し、編集ソフト「プレミア 6.0」が入ったパソコンで編集するという状態であった。

できあがってくる作品はどれも、テレビのバラエティ番組の二番煎じのようなひどいものであった。過剰な演出どころかヤラセ満載の作品が多かった。しっかりとした問題意識を感じさせる作品は皆無であった。技術的にも、「4:3」と「16:9」の画面サイズも分からず、撮影された動画の規格がばらばらだったり、音声が録れていなかったり、周囲のノイズでインタビューが聞き取れなかったりと、トラブル続きであった。

最初は、20人以上いた1期生も、「一応映像制作やってみたかったです〜」「一回やったらから、もう良いです」「サークルと両立できませ〜ん」「学部の卒論が大変なので」などの理由で、半数以上の学生が辞めていった。

いずれにしろ、FLP松野ゼミ1期生の作品は、ケーブルテレビで放送できるようなレベルからは程遠いものであった。

状況が変わるきっかけを作ったのが、法学部2年生の阿部公信（敬称略、現在NHKディレクター）のチームであった。彼らは、「みんなの朝市〜昭島・田中町団地の朝顔〜」という企画書を書いて、ゼミで報告した。

企画概要は以下のようなものであった。

「東京都昭島市田中町団地では、毎週日曜日に朝市が行われている。この朝市は、団地内のスーパーが閉店後、寂しくなった団地の風景に活気を取り戻そうと住民たちが行政・農家に働きかけ、実現したもの。朝市が行われるようになった経緯を紹介しながら、団地住民の表情、また朝市で店先に並ぶ新鮮な野菜を描く。」

東京の多摩地区では、少子高齢化が急速に進んでいる。大規模団地も高度経済成長時代の活気が完全になくなってしまった。人口減少の影響で団地内にあったスーパーも店を閉じるところが出始めていた。田中町団地では、住民が近隣の農家に働きかけて、朝市を開催するところまでこぎつけた。その物語を描こうという企画趣旨だった。

筆者はこの企画書をチェックした段階で、ようやく放送できるレベルの企画が出てきたと思った。

阿部たちが編集してプレビューした作品は、約30分あった。若干間延びしていたものの、ケーブルテレビで放送するには十分なレベルだと判断し、多摩テレビ（東京都多摩市）に持ち込んだ。制作部署の幹部にチェックしてもらったところ、「十分に放送できるレベル」と判断され、「学生ならではの視点で、多摩地域の話題を掘り起こしてほしい」と、2004年5月からの放送が決まった。ただし、毎月30分番組の納品は厳しいだろうということで、10分番組とすることになった。

記念すべき第1回放送は、「ハローキティに会える街多摩センター」となった。田中町団地の作品を30分から10分に縮める作業に時間がかかったため、バックアップとして制作していた作品を1回目とした。スタジオ部分は、大学の教員食堂で撮影した。結果的に、田中町団地のドキュメンタリーは、第2回放送となった。実は、第1回放送「ハローキティに会える街多摩センター」は、部分的に映像が「16:9」のサイズで撮られていた。しかし、当時の多摩テレビ・コミュニティチャンネルのサイズは「4:3」。慌てて編集し、なんとか納品に間に合わせた。

2004年から2005年ごろの作品は、10分の放送枠を埋めるのにも苦勞したものが多い。



写真1 第1回放送のスタジオ部分（2004年5月放送）

学生が作って来たVTRが7分しかなく残り3分が埋まらない。それで、多摩センターなどの公園で、誰かに対して「ありがとう」や「ごめんなさい」とメッセージを伝えてもらう街録インタビューブロックを作り、なんとか10分の枠を埋めるという工夫を行っていた。10分間まるごとVTRで構成した完全な形のドキュメンタリーを制作できるレベルにはまだ達していなかった。

3. 制作体制

毎月10分間の番組を制作し、締め切りを守ってケーブルテレビ局に納品する。これは、簡単なようで実に難しい作業である。まったく素人の学生にとっては、苦難以外の何物でもない。大学のサークル活動で楽しむだけのものではなく、ケーブルテレビという公のメディアに対し、放送に耐える質の番組を毎月供給しなければならない。その点において、責任感を強く感じざるを得なかった。それは指導する立場にあった筆者だけではなく、学生たちも同じであった。

そうした状況の中で、筆者は民放キー局のディレクター・プロデューサーの経験から、実際のテレビ局と同じ制作体制をとろうと考えた。全体を統括するゼミ長、企画会議やスケジュール管理を担当する制作プロデューサー、実際に番組を制作するディレクター、スタジオ部分を担当するキャスター、取材・撮影などを補助するAD（アシスタントディレクター）、カメラ担当、という役割分担。制作に当たっては、制作プロデューサーとディ

レクターはセットで行動することにした。

企画会議と制作会議は、ほぼ毎週行った。また、2年生の4月からゼミ（演習）を履修することになるが、1年次の春休みに、事前にカメラや編集の講習会を受け、短いミュージッククリップを作る体験をもらった。

通常の演習科目の時間帯では、制作会議、作品の試写と合評、新規企画プレゼンとディスカッションなどに充てた。

実際の番組制作活動は、ゼミのコマ以外の時間に行うことになり、3～5チームが同時進行的に番組制作に取り組んでいるという状態を維持した。同時に複数の制作チームを走らせることで、毎月10分間の完パケ番組を、締め切りまでにケーブルテレビ局に納品することが可能となった。

制作会議では、ゼミ長が司会を担当し、制作プロデューサーと企画を担当しているディレクターが番組制作の進捗状況の報告を行い、他の者がアドバイスをを行った。また、数か月に1回は、企画会議を開催し、ネタが枯渇しないようにした。常時、数か月分の番組がストックしてある状態を保持した。

図式化すると図1のようになる。

番組制作の基本は、企画書の作成・提出から始まる。では、学生たちは、この企画書をどうやって書いたのだろうか。基本的には、多摩地域のニュースを探した。新聞の地方版、ミニコミ誌、地域住民センターなどに置いてあるチラシ、各自治体広報関係者、郷土資料館、あるいは、郷土史を研究している中学高校教員などからの情報をもとにして、企画書を作成した。

そして、企画書を書いたら先輩である制作プロデューサーのチェックを経て、正式にゼミの時間に開催される企画会議で議論されることになる。企画内容によっては、事前取材を行っている場合もある。

企画会議で議論され、事前取材が不十分と判断された場合は、再提出となる。企画会議を通過した場合は、取材・撮影のプロセスに進むことになる。

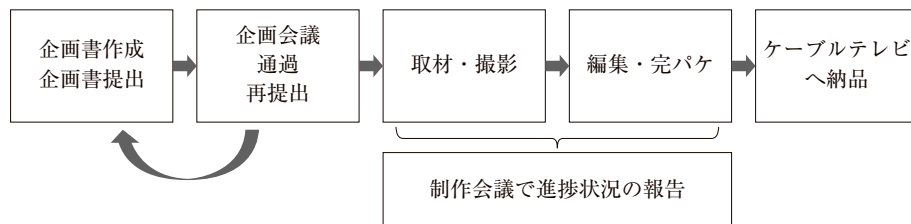


図1 「多摩探検隊」の企画書作成からケーブルテレビ納品までの流れ

4. 「多摩探検隊」放送エリアの拡大

多摩テレビで放送を開始してから、少しずつ、多摩地区の他のケーブルテレビ局にも交渉に出向いた。その理由は、「多摩探検隊」は、多摩地区の広範囲なエリアでネタを探し作品作りを行うため、多摩地域全体に放送エリアを広げたいと考えたからだ。

2005年5月放送の1周年記念番組「多摩探検隊とCATV、市民放送局のこれから」（第13回）では、放送エリアが拡大したことを紹介している。多摩テレビの他に、日野ケーブルテレビ、八王子テレメディア、多摩ケーブルネットワーク、マイ・テレビ（立川）の計5局に広がり、各ケーブルテレビ局のスタッフが「多摩探検隊」に対してコメントを寄せている⁴⁾。

さらに、2014年5月には、「10周年記念番組」（第121回）を放送している⁵⁾。この番組によれば、2013年4月には、東京、神奈川、九州（佐世保、福岡）の合計19のケーブルテレビ局まで放送エリアは拡大し、その視聴可能世帯数は、約260万世帯まで伸びたことを紹介している。

この約260万世帯という数字は、1世帯3人として計算すると、地方の地上波テレビ局の視聴可能世帯数をはるかに上回る。さらに、ケーブルテレビの場合は、1週間に数回にわたって放送枠が編成されるため、月間にすれば、かなりの時間帯となる。このため視聴者は、1か月の間にどこかで「多摩探検隊」を目にする可能性が増加することになる。

この「10周年記念番組」の中でも、ケーブルテレビ局のスタッフが多摩探検隊につい



写真2 放送エリア拡大を紹介する「10周年記念番組」

て、「再放送はいつあるのか、という問い合わせがけっこうあった」などと証言している。

5. 制作された番組

5.1 番組のジャンル

それでは、学生たちはどんなジャンルの番組を制作してきたのか、「10周年記念番組」の中で、10年間に制作されてきた番組は、5つのジャンルに分類できることが紹介されている。その5つとは、「野菜・果物」「動物」「多摩の戦跡」「職人」「アーティスト」である。このうち「動物」については11種類、「職人」は33人を取り上げたとしている。

また対象となった自治体別では、八王子市が32本と最多で、昭島市23本、立川市13本、多摩市11本、日野市9本、青梅市8本、清瀬市7本、武蔵村山市と奥多摩町6本、町田市5本、福生市4本と続いている。

5.2 番組のフォーマット

番組のフォーマットは、大きく分けると2つのタイプに分けられる。

1つ目は、スタジオとVTRを組み合わせる方法である。大学内のスタジオだけでなくキャンパス、あるいはVTRと関連する現場からレポートする方法などがとられた(図2)。

このスタジオとVTRを組み合わせたフォーマットが標準であったが、2005年8月の「多摩の戦跡」をきっかけに、10分間まるごとドキュメンタリーとして放送することが多くなっていった。2つ目のフォーマットは、ドキュメンタリー形式である(図3参照)。番組のリード(前文)に当たるアバン、そして、タイトル、本編、ラスト部分が来てエンドロールと続く。



図2 スタジオがある場合の番組進行フォーマット



写真3 「東光寺大根(前編)」第155回のフォーマット



図3 ドキュメンタリーの場合のフォーマット



写真4 「元特攻志願兵の証言」第137回のフォーマット

5.3 シリーズ化された番組

シリーズ化された番組もいくつかあった。最初に試みたのが、「多摩の酒」シリーズであった。これは、水のきれいな多摩地区にある地酒メーカーを連続して紹介しようというもの。レポーターが実際に酒蔵を訪ね、その製法や特徴を紹介し、最後は自らが地酒を堪能するというフォーマットになっていた。

「シリーズ多摩の酒① 澤乃井」第10回、「シリーズ多摩の酒② 石川酒造」第15回、「シリーズ多摩の酒③ 中島酒造」第22回、「シリーズ多摩の酒④ 田村酒造」第34回、「シリーズ多摩の酒⑤ 渡辺酒造」第39回の5回シリーズであった。

また大学生が多摩地域の小学生に映像制作の方法を指導してコンテンツを作ってもらった「子ども放送局」もシリーズ化した。協力してくれたのは、昭島市、八王子市、清瀬市、川崎市の小学校、教育関連施設、府中市の特別支援学校であった。制作された作品は、合計で29本となった。



写真5 「シリーズ多摩の酒③ 中島酒造」第22回のシーン

この「子ども放送局」は、小学生たちが大学生のサポートを受けながら、地元の祭りや商店街、学校内などをレポートするもので、フォーマットもシンプルなものである。最初にレポーターの自己紹介があり、それから、祭りの会場を回り、関係者へインタビューしたり、出店で食レポをしたりして、祭りの趣旨、様子、人間模様を紹介するものであった。

多摩を歩いてレポートするシリーズ企画「多摩あるきたい！」は、9本が制作・放送された。東京の奥地にある滝を訪ねた檜原村編、頂上への様々なルートに挑戦した高尾山編、基地の町の物語を追った福生編、多摩八十八ヶ所巡り（3回）、戦前は軍都と呼ばれ戦後は米軍基地があった形跡を追った立川編、町おこしや歴史との関係性を追った猫神社（青梅）編、飼い猫がいなくなった人たちがお参りに来る猫神社（立川）編。

この「多摩あるきたい！」シリーズは、文字通り、レポーターが足で歩いて多摩地域を紹介する形式をとり、多摩探検隊という名前にふさわしい企画であった。

多摩で栽培されている野菜や果物をレポーターがまるかじりし、それにまつわる物語を掘り起こそうとしたのがシリーズ「多摩まるかじり！！」で、計4本が制作・放送された。日野市のトマト（第38回）、八王子市の陣馬りんご（第43回）、稲城市の梨（第54回）、町田市の禅寺丸柿（第97回）を栽培する農家を取材し、実際にレポーターが、現物をまるかじりしている。



写真6 「昭島子ども放送局」第8回では昭島市産業まつりを紹介した。



写真7 日野市のトマトをまるかじりするレポーター（第38回）

他に、毎年8月に放送されたシリーズものとして「多摩の戦跡」がある。制作・放送された番組は14本。これは、多摩地区にある戦争の遺跡を巡り、その歴史や証言を掘り起こしてドキュメンタリーを制作する企画であった。次のブロックで詳述する。

また、シリーズ「中央大学と戦争」も9本を制作し放送された。これは、戦争を体験した中央大学の先輩を、後輩である学部生が訪ね、その証言を記録し後世に伝えていこうというプロジェクトで、もともとは執筆をメインにした企画であった。このプロジェクトは、『戦争を生きた先輩たち』（全3巻）として結実した。その後、貴重な証言をドキュメ



写真8 ドキュメンタリーシリーズ「中央大学と戦争」の原作（3巻）

ンタリー化しようと企画したのが、このシリーズ「中央大学と戦争」である。完成したドキュメンタリーは、中央大学の本部が八王子市にあることから、「多摩探検隊」として放送した。これについても、次のブロックで詳述する。

6. 「多摩の戦跡」——ドキュメンタリー番組へ

「多摩探検隊」という番組が、大きく転換するきっかけとなったのが、2005年8月から始まったシリーズ「多摩の戦跡」である。これまでの、多摩地区の町ネタを掘り起こした多摩地区限定の情報番組、学生レポート番組だったものが、本格的なドキュメンタリー番組へ大きく方向性を変えるきっかけになったといえる。それは、制作体制とも関係している。

「多摩探検隊」は、2004年5月にスタートして1年経った段階で、8月と3月放送の番組は、4年生が制作することに決めた。それは、2年生から番組制作活動を経験し、十分な撮影・編集技術を保持し、就職活動が終わった4年生が、終戦の日を迎える8月と、卒業していく3月の計2回を制作することで、番組の質を高めようという意図があった。当然、ADとして、2、3年生が同行していくことになり、4年生の取材・撮影技術は自然に後輩に伝承されると考えたからである。この決断は、「多摩探検隊」の質の向上と制作体制の確立に、大きな効果をもたらした。

4年生が中心となって制作した最初の作品は、2005年8月放送の「60年目の記憶～多摩地区に残る戦争の傷跡～」（第16回）。番組紹介には、次のように書かれている。

今年は、終戦60年の節目の年である。私たち「多摩探検隊」は、昨年5月の放送開始より、さまざまな「多摩に埋もれた魅力」を掘り起こしてきた。そして今回、「多摩探検隊」は、60回目の終戦記念日を迎える8月の放送に合わせ、「戦争と平和」を題材に「多摩地区の戦災」について取材を試みた。取材した場所は主に、東大和市にある「旧日立航空機立川工場変電所」と八王子市相即寺にある「ランドセル地蔵」である。

今となっては、戦争は「どこか違う世界で起こるもの」という認識が強くなってきたと感じる。また、戦争といえば「広島」、「長崎」、「沖縄」、「東京大空襲」などといったような特定の地域、事項しか注目を浴びず、マスメディアも、なかなかそれ以外を報道しない傾向があると思う。

しかし、私たちが生活するこの多摩地区にも、「戦争の歴史」は確かにあるのだ。今回の企画を通し、多摩地区の戦災に焦点を当てることで、自分の身近、日常にも



写真9 シリーズ「多摩の戦跡」の1回目で取り上げた秘話・ランドセル地蔵

「戦争の傷跡」が存在することを伝えていきたい。そして、「悲惨な過去」があつてこそ、「平和な現在」があり、それが「未来」につながっていくことを再考するきっかけになればいいと考えている。

ディレクターを務めたのは、法学部4年生になっていた阿部公信。彼は、多摩探検隊が始まるきっかけを作り、さらに多摩探検隊がドキュメンタリーへ向かうきっかけを作ったことになる。シリーズ「多摩の戦跡」に関する紹介メッセージには、学生が地域にこだわりながら戦争の歴史を掘り起こして記録し後世につなげていこうという強い意思がこめられていた。

この番組は、冒頭からエンディングまで、スタジオなしのドキュメンタリーとなっていた。この作品をゼミで試写したところ、後輩たちから自然と拍手がわいた。その場にいたゼミ生たちは、「一度は、自分も、このような本格的なドキュメンタリーを制作してみたい」と思ったに違いない。

「ランドセル地蔵」とは、以外と知られていない物語であり、反響も大きかった。戦時中に八王子市に疎開していた児童、神尾^{あきじ}明治くん（9歳）が、米軍戦闘機の銃撃空襲を受け死亡した。都心から駆け付けた母親は、八王子市相即寺にある153体の地蔵のうち、息子によく似た表情のお地蔵さんに形見となったランドセルを背負わせたという秘話を描いたドキュメンタリーであった。

翌2006年8月には、FLP松野ゼミ2期生たちが、「61年目の祈り～青梅に墜落した



写真10 「61年目の祈り～青梅に墜落したB29～」の1シーン

B29～」(第28回)を制作・放送した。この作品は、1945年4月2日、東洋一の規模といわれた中島飛行機武蔵製作所を爆撃した後に墜落したB29にまつわる秘話を掘り起こしたドキュメンタリー。墜落死した米兵に対して石を投げていた住民たちを説得したのが、当時すでに著名だった作家の吉川英治。彼は、死ねば敵兵でも同じ人間、仏様であるから、丁寧に葬ろうと呼びかけた。米兵の遺体は、近くのお寺の境内に葬られた。2006年4月2日には、日米合同の慰霊祭が行われたという物語をドキュメンタリーとして制作した。

この作品「61年目の祈り～青梅に墜落したB29～」は、2006年の「地方の時代」映像祭(NHK、民放連など主催)で、奨励賞(市民・自治体・CATV部門)を受賞した。これがきっかけで、「多摩探検隊」は、年に2回はドキュメンタリーを制作するというポリシーが固まった。

ドキュメンタリー傾向がさらに強まったのは、シリーズ「中央大学と戦争」の開始であった。「元特攻志願兵の証言」(第137回)がシリーズの1作目であった。これは、中央大学OBで元特攻隊員である神原 崋^{たかし}さん(当時91歳)の経験をドキュメンタリー化したもの。戦況悪化の中で、「どうせ死ぬなら地上戦で玉砕するより潔く特攻で」と特別操縦見習士官を志願していくプロセス、生き残って母親と再会した時のエピソード、平和な時代を生きる若者へのメッセージなどで構成された。

この「元特攻志願兵の証言」も、2016年「地方の時代」映像祭で、奨励賞(市民・学生・自治体部門)を受賞した。

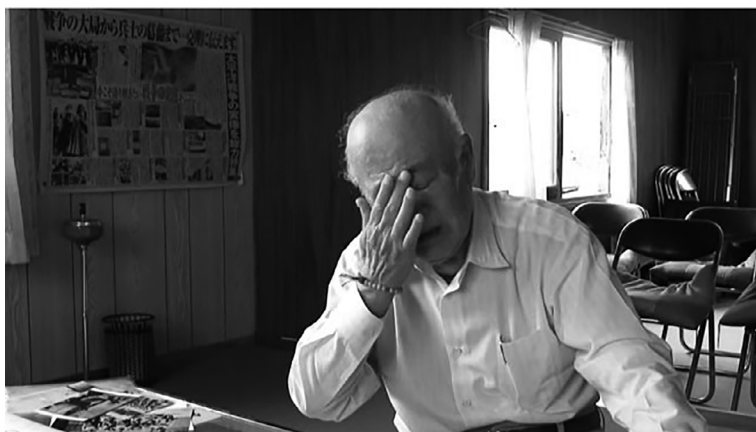


写真 11 母親との再会を思い出し涙する中大 OB（「元特攻志願兵の証言」の 1 シーン）

7. 増加する受賞作品

最初は、大学生が多摩地域を歩き回ってレポートするという情報番組のようなフォーマットで始まった「多摩探検隊」だった。しかし、シリーズ「多摩の戦跡」が始まってからドキュメンタリーを制作しようという気運が大きくなった。このため、スタジオから VTR、そしてスタジオで締めくくるといった最初のパターンが徐々に減少し、完全に VTR だけで構成された番組の割合が増加していった。

ドキュメンタリーが増加していったことで、様々なコンテストで受賞する機会も増えてきた。例えば、「地方の時代」映像祭では、2021 年までに 15 作品が受賞している。これは、全国の大学でも、1 つのゼミが受賞している数では最多である（2022 年 2 月 18 日現在）。2010 年、2019 年、2020 年には、2 作品ずつが入賞している。

〈「地方の時代」映像祭〉

2006 年「61 年目の祈り～青梅に墜落した B29～」(奨励賞)

2010 年「城南子ども放送局」(優秀賞)

「顔面紙芝居～芸の道、家族とともに～」(奨励賞)

2011 年「硫黄島から戻ったイチョウ」(優秀賞)

2013 年「ノネコの引越し作戦～海を越えて命を守る～」(奨励賞)

2014 年「絵手紙に綴られた東日本大震災」(優秀賞)

2015 年「『青い目の人形』プロジェクト」(奨励賞)

- 2016年「元特攻志願兵の証言」(奨励賞)
 2017年「後に続くを信ず—元特攻志願兵の証言—」(奨励賞)
 2018年「『私は何者であるのか…』—ある台湾人学徒の証言—」(奨励賞)
 2019年「九死一生—元台湾人日本兵の記憶—」(奨励賞)
 「ハンセン病を生きて」(奨励賞)
 2020年「ベトナム戦争の記憶—元LST乗組員の葛藤—」(優秀賞)
 「被爆死した米兵を追って」(奨励賞)
 2021年「秘話～「知覧」にある米兵慰霊碑～」(奨励賞)

「地方の時代」映像祭以外のコンテストで入賞した事例については、主なものだけを記載しておきたい。

〈全国自作視聴覚教材コンクール(主催:一般財団法人 日本視聴覚教育協会)〉

- 2019年「ペンシルロケット—国分寺から飛んだ夢—」(文部科学大臣賞)
 2021年「日本で夢見た女性パイロット～朴敬元の生涯～」(文部科学大臣賞)

〈日本外国特派員協会 THE SWADESH DERROY MEMORIAL SCHOLARSHIP AWARDS〉

- 2021年「オンライン真空地帯—2020」「2020:The Year Stranded In The Online Space」ビデオ部門第1位(グランプリ)

〈東京ビデオフェスティバル(審査員:大林宜彦監督, 高畑勲監督など)〉

- 2011年「城南子ども放送局」(ビデオ大賞)(筑紫哲也賞)
 2014年「ノネコの引越し作戦～海を越えて命を守る～」(筑紫哲也賞)
 2018年「女学生と風船爆弾」(ビデオ大賞)

〈映画文化制作者連盟アワード(文科省, 経産省など後援)〉

- 2020年「被爆した米兵を追って」(部門優秀賞)
 2021年「秘話～「知覧」にある米兵慰霊碑～」(部門優秀賞)

〈東京ドキュメンタリー映画祭—映画館上映〉

- 2019年「『私は何者であるのか…』—ある台湾人学徒の証言—」(19分)
 「拓魂—ある満蒙開拓団員の証言—」(19分)
 2021年「日本で夢見た女性パイロット～朴敬元の生涯～」(28分)

「秘話 ～「知覧」にある米兵慰霊碑～」(30分)

このほか地方自治体などのコンテストを含めると、入賞実績はさらに、20以上を数える。しかし、入賞実績が増えだすのは、2010年以降のことである。これは、2005年8月から始まったシリーズ「多摩の戦跡」でドキュメンタリー制作のきっかけができたこと、さらに、2006年の「地方の時代」映像祭で入賞したことがはずみとなった。

さらに、8月と3月については、4年生が総力をあげて制作するという仕組みができたことが、良質の作品を生み出す連鎖につながったと思われる。

8. 休止を決断した複数の要因

8.1 「番組」か「作品」か

2004年5月にスタートした「多摩探検隊」は、約15年間継続して10分間の番組を毎月出し続け、ついに、2019年3月をもって休止した。ケーブルテレビの視聴可能世帯数は、約260万まで拡大していた。途中から、東急沿線のケーブルテレビ「イッツコム」でも、30分番組「にっぽん列島探検隊」が放送開始されていた。ゼミで制作されるドキュメンタリーの数も、入賞する数も増えていた。

しっかりした制作体制、番組の質の向上、視聴可能エリアと世帯数の増加、ケーブルテレビ局側からの評価と期待の高まりなど、休止する理由などまったくなかったといえるかもしれない。しかし、第100回放送を超えたあたりから、放送枠を毎月きちんと間違いなく埋める「番組」制作作業を優先させるか、それともコンテストで入賞できるような「作品」制作作業を優先させるかで、筆者も学生たちも悩み始めたのは事実である。

特に問題となったのは、番組の「尺」である。ドキュメンタリー作品を目指すと、最初から尺を意識しない。ディレクターは良い作品を作ろうと考えるので、おのずから取材対象者やロケ場所が増えてくる。収集する資料と接写も増えてくる。さらに、ストーリーテリングを考えながら編集し始めると、とても10分に詰め込むのは難しくなる。そうになると、番組として完パケするには、前編10分と後編10分のように分割しなければならない。18分とか27分とか中途半端な作品ができてしまうと、10分×2番組として編集しなおすには手間がかかる。

そうなってくると、「多摩探検隊」が始まった当初のフォーマット、つまり、スタジオがあり、どこかの公園で「ありがとう」を街録した短いVTRを入れ、またスタジオに戻り、さらに長いVTRを入れ、最後にスタジオに戻って閉める、というフォーマットで番組を作ろうという学生がいなくなってくる。

学生たちは企画が通れば、20分、30分のドキュメンタリーを作りたいと考え、作業を始める。「10分の番組枠を埋めなければいけない」という義務感は、だんだん重荷のように思えてくる。10分の「枠」を埋め続ける理由、価値、あるいは、そういう情報番組のまねごとを大学で行って意味があるのか、という疑問も生じてくる。結果的に、10分の番組を制作しつづけること自体の意味があいまいになってきたのである。

「番組」か「作品」かという迷い、それが休止につながる1番目の要因となった。

8.2 学生たちの認識の変化

さらに、学生たちの認識が変化してきたということも背景にあった。インターネット、スマートフォン時代が到来して、テレビを見ない学生が多くなってきた。特に地方から東京にやってきた学生は、購入する電化製品の中に、テレビは含まれていないのが現在では普通である。パソコンとスマートフォンがあれば、十分なのである。

さらに、優れた映画、ドラマなどは、アマゾンプライムかNetflixと契約してパソコンかスマートフォンで視聴してしまうのが、現代の学生なのである。紙の新聞などは、まず手に取ることもない。ニュース、災害情報なども、すべてWebのニュースサイト、あるいはスマートフォンでツイッター情報を収集するのである。「グラッと来たらNHK」の時代ではなくなっているのである。現代の若者は、スマートフォンがもっとも接触するメディアであり、映像はテレビよりもYouTubeを見ている。

そうした状況の中で、10分間の番組を制作し放送を出すという作業を魅力的に感じる学生は減少している。筆者は昭和30年代の生まれであるから、テレビというメディアに対する憧れや影響力を肌で感じてきた世代である。巨人、大鵬、卵焼きの時代で、テレビコマーシャルの効果も絶大な時代だった。今でも、YouTubeよりもテレビにシンパシーを感じる。しかし、若者と話すと、テレビメディア自体がレガシー・メディアとなってしまっていることを実感するのである。結果的に、ケーブルテレビで放送するための番組を毎月制作するという作業に関心がない学生が増えてしまったといえる。ユーチューバーなるものが圧倒的な勢いで増加している現状では、無理もないのかもしれない。

デジタル時代に、若者が接触する主たるメディアは既に、テレビからパソコン、スマートフォンへ移ってしまっていることが2番目の要因となった。

補足しておくが、FLPジャーナリズムプログラムは、2003年にゼミ生募集を開始してから志願者は右肩上がりで見事上昇した。最大で約150人の志願者がいた。しかし、2021年の志願者は、約60人。半分以下に減った形だ。さらに、当初は、マスコミ希望者がかなりいて、彼らが志願してきていた。しかし、現在は、「映像面白そうだから」「ジャーナリズムには興味ないけど映画好きだから」という理由で受験してくる学生が多い。結果的

に、迷いながらゼミ活動を行うことになり、途中で辞めていく学生も多くなった。FLP 松野ゼミでは、当初 10 人以上いたゼミ生が最終的に 2 人になった期もあった。

1960 年代～1980 年代のマスコミ全盛時代とはまったく異なるメディア状況に入ってきていることだけは確かだ。

8.3 YouTube 配信のメリット

2010 年 12 月から、それまで放送した番組「多摩探検隊」を YouTube でも配信を開始した。放送を出しながら、同時に YouTube でも配信し、コンテンツをマルチユースする方法である。その結果、放送と YouTube 配信の差異がわかるようになった。

YouTube の場合は、「尺」のことを気にしなくてよい。そもそも、放送のように「枠」というものがない。このため、学生はドキュメンタリー作品の制作に専念すればよい。

また、YouTube の場合は、「締切」を意識する必要がない。一方で放送の場合は、番組を毎月完パケし、必ず期日までに納品しなければならない。なので、締切前の追い込み作業は毎月のように行われ、心身共に疲弊した。ただし、YouTube の場合は、「締切」の意識は、作品を制作しているディレクター個人にゆだねられるため、人によってはいつまでも完成できないという状況も生まれてくる。スケジュール管理をするプロデューサーの働きが重要になってくる。

放送よりも YouTube 配信の方が、自由度が高いこと。特に、「尺」と「締切」という制限がないことで、ディレクターは自由に取り組めるということが 3 番目の要因として挙げられる。

しかし、一方で、人間は怠惰である。ディレクターがやる気を失ったりすれば、作品はいつまで経ってもできないし、ゼミという制作集団全体の制作能力は落ちていく。放送用の番組「多摩探検隊」を制作した時のように、先輩と後輩が 1 チームとなって、締切のプレッシャーと闘いながら番組を制作していくという情熱は感じられなくなった。YouTube 配信に切り替えた以上、ディレクターとチェック役のプロデューサーを信じるしかない。

9. 番組制作と能力開発の関係

9.1 地域社会との接触

ケーブルテレビ番組「多摩探検隊」の制作を約 15 年間継続して、学生のどんな能力が開発されたと問われたら、まず最初に、「社会人としての自覚、作法、意識」ではないかといえる。ゼミの試験を受けた時は、金髪でろくに挨拶もできず、敬語もうまく使えず、言葉遣いや振る舞い自体が“ちゃらい”若者だったのが、番組制作活動によって、みるみ

るうちに大人に成長していく。その第1の要因は、「地域社会との接触」にあると考える。

企画が通ったら、まず、先方にアポを取らなければならない。大学の外に出なければ、番組はできないからだ。大学外の大人からアポを取るには、丁寧な言葉を使わなければならない、敬語も使わなければならない。大学の近くの農家や職人さんのところに行き、撮影をさせてもらうには、言葉遣い、身なり、振る舞い方などに注意しなければならない。取材や撮影は、まず相手との信頼関係を築かなければできない。特に撮影に時間がかかるドキュメンタリーでは、それがより一層必要とされる。

面白いことに、金髪の学生は、100%が金髪を辞める。黒く染め直す学生もいれば、一回坊主やスポーツ刈りにしてくる学生もいる。服装、靴などは、取材しやすい恰好で現場に行くようになる。チームで、大学の外に行き、地域社会の人たちと接触すること自体に、大きな意味があり、それが、地域社会での振る舞い方を学ぶことになり、学生を大人として次第に成長させていくように思える。

取材の前には、関連資料を収集したり、読み込んだりする。特に新聞検索やネット検索は徹底してやる。このため、探索的な方法、情報を集めてファクトを積み上げる方法に習熟してくる。さらに、歴史に関する企画であれば、国会図書館、防衛研究所、米国国立公文書館などで資料を収集することになる。こうした作業もプロデュース能力を向上させるきっかけとなる。取材と撮影、インタビュー、最終的なドキュメンタリー制作のためには、様々な資料収集、論文や書籍などの参考文献の読み込みが必要であることを、最初の段階で知る。

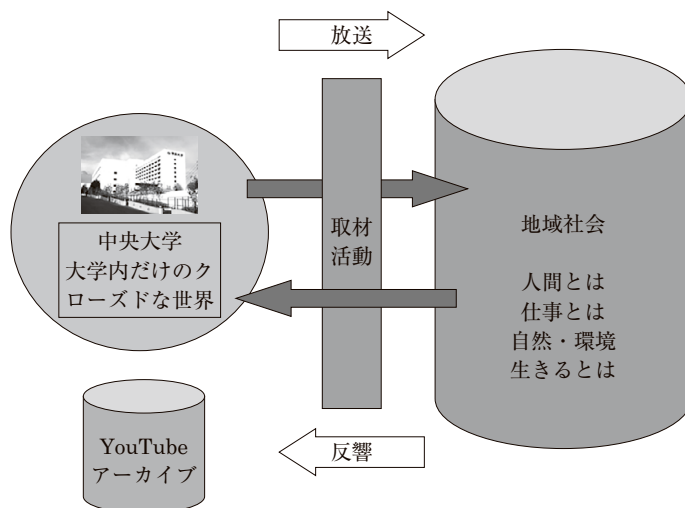


図4 番組制作活動は「地域社会との接触」である（筆者作成）

そしていよいよ、カメラを持って、現場に行くことになる。市役所、農協、農家、工場、団地、学校、NPO などに行き、関係者にインタビューしなければならない。そうしないと番組はできない。否応なしに、他人とコミュニケーションをとる。身なりや礼儀が悪いと、相手から拒絶されることがある。これを回避するにはどうしたら良いかを自らが考えることになる。

筆者も、地方に取材に行く場合に、学生を引率したり、同行したりすることがある。現場で見ていると、学生たちが取材相手と交渉したり、インタビューしたりしているうちに、みるみるうちに成長していくのが手に取るようにわかる。「礼儀と手順が大事」「シャイだと損をする」「共感が大事だが聞くべきことはちゃんと聞いておく」などと、学生自らが悟っていくのである。全く知らない人たちの信頼を得て、スムーズに撮影を時間内にこなすにはどうしたらよいか。言葉にできないスキルや身のこなしは、現場で活動することでしか学べないものである。実社会で必要とされるコミュニケーション能力は、大学の中だけにいては育成されない。やはり、フィールドに出て他人との交渉をするプロセスの中で、養われるものであると確信している。

そして何より、地域社会での取材体験は、自分自身に対する自信を取り戻し育成していくことにつながる。フィールドワークをするということは、体験であり経験である。そして、自ら語る物語を自分で紡いでいることになる。これが結果的に、就職活動でも役に立つことになる。さらにいえば、学生時代における地域社会での実習は、社会に出てからもよい思い出と同時に自信につながっていく。

9.2 番組制作による多様な能力開発モデル

筆者は、番組制作活動は、学生たちの多様な能力を開発するプログラムを内包していると考え（図5参照）。

最初のネタ探し、企画、事前取材の段階で、企画力や交渉力が育成される。さらに、取材・撮影となると、コミュニケーションを必然的に取らざるを得ず、トレーニングを積むことによって、その能力は飛躍的に向上する。また、撮影の段階で重要なのは、カメラを操作することだけでなく、何をどのように撮るかである。現場で構図を考え、ドリーや雑観の撮影を行ううちに感性も次第に向上してくる。

そして、編集段階になると、チームで作業を行うために協調性が向上する。作業を進める中で、表現能力も育成される。最終段階は、アウトプットであり、作品を完成させて、上映会、放送、配信などの活動を行う。ここで養われるのは、責任感であり自己効力感である。特に自己効力感は重要である。自分が苦労して完パケした作品が、上映会などで評価されると、人は、「やればできる」という自己効力感を強化することになる。

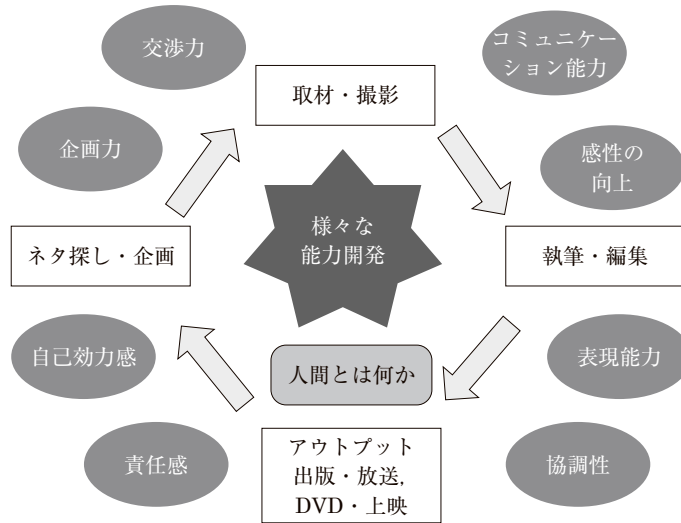


図5 番組制作活動による多様な能力開発モデル（筆者作成）

この「企画—撮影—編集—アウトプット」という映像制作サイクルのプロセスに、様々な能力を開発するプログラムが内包されていると筆者は考える。

「多摩探検隊」では、2年生からゼミ活動が始まるため、4年生までの3年間で、このサイクルを2、3周する。この過程で、多様な能力が開発されていく。

9.3 就職活動への効果

最終的に、このサイクルモデルの教育的効果は、就職活動の時点で発揮される。FLP松野ゼミでは、毎年のように、NHKや民放（東京キー局、準キー局など）をはじめとして、新聞社、通信社、出版社、広告代理店などのマスコミ業界へ就職していく。ゼミ生は平均で1学年10人ぐらいであるが、マスコミ就職の割合は70～100%。ほかにも、NTTを始めとする通信業界、日本航空や全日空などの運輸業界、三菱商事や伊藤忠商事などの商社、銀行などへ就職する。

就職活動で最も重要なものは、エントリーシートとコミュニケーション能力であるが、地域社会の人たち取材して、地域密着型の番組制作活動を行っていれば、自分を売り出すための材料は自然と収集できることになる。番組制作活動を通して、特技や趣味を育てた学生もいる。また、作品1つ1つが、「大学時代に取り組んだこと」になるため、エントリーシートを書くのも楽であるし、面接で語るのも容易である。抽象論ではなく、自分が体験して壁にぶつかりどうやって克服してきたのかを、そのまま具体的に話せばよいからだ。

つまり、番組制作活動を複数こなしておけば、就職活動はうまくいく。抽象論で語れば、面接官の方が社会経験は豊富であるから、途中で答えに窮することになる。地域社会でいくつかのプロジェクトをこなしておけば、具体的な苦労やそれを乗り越えた話をするができる。トピックスそのものも、番組になるぐらいだから、面白い。自分が体験したことなら、自信をもって普通に話せるはずだ。

結局、最初の問題意識、現場での経験、活動から学んだ具体的な方策、自分が目指している職種、これらを1本の筋を通して話せば、就職活動は難しくない。そのためにも、フィールドで活動することは重要であると考える。

9.4 年次を超えた求心力

FLP松野ゼミのメリットの1つには、学年を超えた団結力がある。番組制作は、基本的にディレクターとプロデューサーがセットになる。そして、ロケに行く際に、ADを募り、撮影クルーが編成される。ロケのたびにクルー編成を繰り返し、現場ではチームで活動する。毎回、学年を越えた取材チームが作られ、活動するのである。このプロセスが、学年を越えて、番組制作の技術が伝承され、さらにゼミ全体のまとまりが作り上げられていく。同窓会の時にOBOGが集まると、学年を越えた付き合いが、卒業後もできていることがわかる。

この求心力は、就職活動の時にも発揮される。OBOG訪問は、ゼミのつながりだけでできるほどネットワークができあがっている。また、就職活動シーズンが近づくと、先輩たちが協力して、エントリーシートの添削や模擬面接などを行ってくれている。

10. 結 論

学生制作番組「多摩探検隊」の約15年を振り返り、3つの視点で考察することが本論文の目的である。3つの視点とは、①なぜ約15年間もつづけることができたのか、②なぜ視聴可能世帯数が約260万まで成長したにもかかわらず、休止することを決断したのか、③番組制作活動はどんな教育的効果をもたらしたのか、である。

①のなぜ15年間も続いたのかという視点については、第1に制作体制が確立されていたことが理由として挙げられる。通常のテレビ局のように、ゼミ長（制作統括）—プロデューサー—ディレクター—ADというシステム化された組織ができあがっていて、効率よく番組制作活動が行われていた。また、番組のフォーマットが明確であったこと、制作する番組をシリーズ化するなど、先を見越した制作スケジュールが組まれていたことなども、番組が続いた理由であろう。さらに、FLPという全学部から選抜する形式で学生が

あつめられ、ゼミ全体のモチベーションが高かったこともプラスに働いたと思われる。

②のなぜ休止を決断したのかという視点については、3つの原因を指摘した。1つ目は、「番組」か「作品」か、という選択を迫られる状況になったということ。シリーズ「多摩の戦跡」の衝撃が大きく、学生たちが穴埋めになりがちな「番組」から、ドキュメンタリーという「作品」作りを志向し始めたことが理由として挙げられている。「番組」の枠を埋める作業は消耗する。民放の情報番組やワイドショーのようなことを大学ではやりたくないという意識もあった。一方で、ドキュメンタリーは映画のように「作品」であり、永久に残す価値のあるものという認識がある。そこが、「多摩探検隊」の方向性が、番組から作品へ方向転換した背景にあったと考えられる。

2つ目は、学生たちのメディア観の変化である。現代の若者は、新聞やテレビなどのオールドメディアよりも、パソコンやスマートフォンとの接触時間が長い。ニュースも映像も、パソコンやスマートフォンで見る。そういう変化の中で、テレビや番組という概念よりも、コンテンツという志向が強い。ケーブルテレビ向けに番組を作っていることよりも、単品としてのコンテンツ制作の方がしっくりくる世代である。彼らはテレビよりも、YouTube を見ているのであり、Netflix のコンテンツを見ているのである。彼らのメディア観の変容が、ケーブルテレビ向け番組制作へのモチベーション低下につながったのではないかと推測できる。

3つ目は、テレビと YouTube の違いである。テレビには「枠」と「締切」がある。しかし、YouTube は、コンテンツの「尺」は自由だし、「枠」を埋めるということはない。また、納品する「締切」もなく、好きな時にアップロードすればよい。こうした自由度の高さから、結果的に、ケーブルテレビ向け番組制作・放送から YouTube 配信に切り替えることにした。

③の番組制作活動は、どんな教育的効果をもたらしたのかという視点だが、学生の多様な能力を開発する機能をもっていることは間違いない。その理由は、1つ目は、地域社会の人たちとコミュニケーションすることで、より大人に成長していくということである。2つ目は、「企画—撮影—編集—アウトプット」というサイクルの中に、企画力、交渉力、コミュニケーション能力、感性の向上、表現能力、協調性、責任感、自己効力感が自然に向上するようなプログラムが内包されているということである。実際に、就職活動においてその教育的効果が十分に発揮されていること、卒業後も学年を超えた求心力が維持されていることがわかった。

注

- 1) <http://www.tamatan.tv/> (2022年3月21日確認)

- 2) <https://www.youtube.com/user/TamatanArchives> (2022年2月18日確認)
- 3) 完パケとはテレビ業界（民放）の業界用語で、持ち込めばそのまま放送できる完全パッケージされた番組、VTRのこと。編集、BGM、テロップなどが既にミックスされた状態で、すぐに放送に出せる状態の作品。
- 4) <https://youtu.be/QS5MCL7XdRI> (2022年2月18日確認)
- 5) <https://youtu.be/OkwU7cuoFCk> (2022年2月18日確認)

参考文献

- 奥村信幸（2020）「大学の「映像制作」教育は何を教えているのか？：ジャーナリズム実践教育の試みの現状」『マス・コミュニケーション研究』日本マス・コミュニケーション学会，97巻，219-221頁
- 高橋直治（2021）「日本映像メディア教育実践史再構築のための系譜学的まなざし：大学における映像表現行為に着目して」『教育メディア研究』日本教育メディア学会，27(2)，43-79頁
- 松野良一（2005）『市民メディア論』ナカニシヤ出版，全243頁
- 村田雅之（2013）「映像制作を通して学ぶ—新しい教育デザインの形—」『映像制作で人間力を育てる—メディアリテラシーをこえて—』田研出版，165-197頁
- 森田良成（2020）「ドキュメンタリー制作を通じた学びの可能性：「映像制作実習」の事例」*Journal of humanities research, St. Andrew's University* (12)，185-204頁